

明治・大正期の少女雑誌による教育の意味するもの

下^{しも} 村^{むら} 陽^{よう} 子^こ

はじめに

明治二十年代の「少年」を明確に読者対象として掲げた雑誌の刊行に始まり、三十年代には「少女」読者層を対象とした雑誌が創刊され少女という年齢カテゴリーを社会的に確立させるのに一定の役割を果たした。この背景には、一八九九（明治三二）年制定の女子のための中等教育制度である高等女学校令によって女学生という読者層が顕在化したことがあった。以降、大正時代にかけて多数の少女雑誌が刊行されていることはよく知られているところである。これら少年少女にターゲットを絞った雑誌群が当時の彼女たちの読書生活においてどのような意味を持ち、またどのような影響を与えていたのかを考えるに当たって、それらを基本的に特徴付けていた「教育」という目的が目指した「雑誌による教育」の意味するところを明らかにしたい。そのうえで、同じく明治期に少年少女の読書生活に新たに登場した図書館という社会的な読書装置において雑誌がどのように位置付けられていたのかを検討したいと思う。明治二十年代は、図書館が児童という利用層の存在を明確に認識しこの利用層に対応し始めた時期でもある。少女雑誌という新しいメディアに図書館がどう対応したかにより、当時の少女雑誌の社会的な認知度がある程度示されるものと考ええる。

当時、少女雑誌を実際に享受することができた読者層は当然限られており、都会の中産階級が中心であった。その発行部数からみて明治・大正期の少女雑誌による教育の意味するもの

も明治四十年代に至って代表的な少年雑誌の公称発行部数として十万某という数字が示され、明治末から大正初頭にかけて抜群の購読数を誇った『少女世界』の最盛期でも五万から二十万部近い数であったという。図書館利用に至っては、少年よりさらに利用が困難であったと思われる当時の少女の場合、実際に利用できたのはごく一部の限られた者に過ぎなかったであろう。しかし、いずれもこの時期に登場して以来今日まで少女たちの読書活動を構成する重要な要素として、この時期にその基礎を確立していることに注目したい。

1. 雑誌と学校教育の関係

少年少女という読者層の存在が注目され広く認められるようになったのは明治時代であり、我が国における近代的な意味での児童文化が形成されていった時期に当たる。印刷メディアを中心とする児童文化が新しい発展をみせた結果でもあった。尼崎のみは、明治二十年代に相次いで創刊された少年向け雑誌群の先頭に位置付けられる『少年園』は、それまで区分が曖昧であった『青年』読者層から『少年』読者層を明確に分化させる役割を果たしたが、『少女』読者については未分化なままに『少年』の中に内包されたままだったことを指摘している。しかし特に少女読者からの投書欄を設けるなど、少女読者層をも視野に入れていたのである⁽¹⁾。その後、一九〇二(明治三五)年創刊の『少女界』に始まる『少女』読者専用の雑誌の発行によって、『少年』と対をなすカテゴリーとしての少女読者層のジェンダー分化が明らかになっていった。三十年代に入ると、雑誌読者層の性別による分化と同時に年齢による細分化が進んでいく。佐藤りかは、明治期の雑誌メディアのマーケット・セグメンテーションが『青年』から『少年』を、『少年』から『少女』を分化させ少女読者という新しい読者カテゴリーを成立させたプロセスを詳しく追っている⁽²⁾。

明治時代の成立からしばらくは、政府が国家の基本政策として内外に示した五カ条の御誓文に「智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基振起スヘシ」とあるように、それまでの国家体制として旧思想や旧文化を否定し、欧米の文化をできるだけ吸収することに努めながらひたすら近代国家としての歩みを進めていた時期である。また明治期は日本における近代的な児童文化が形成された始めた時期でもある。この時期に新しい知識や情報を提供するという重要な役割を担った新聞とともに雑誌が次々と創刊された。その中から少年少女という新たな読者層に的を絞ったものが現れてくるが、この新しいメディアの登場と学校教育制度が深く関わっていることは度々指摘されてきた

ところである。

一八七五（明治八）年には報知新聞社の『新聞小学』という初めての少年雑誌が創刊され、明治十年創刊の『穎才雑誌』をはじめ数誌が登場している。菅忠道が述べているように大人向け新聞・雑誌勃興の気運の中で創刊されたものであり、文を作ることを学問の大部分と考えた前時代からの伝統を継承するものだった。従って「社会の上層一部の子弟を対象にした学習雑誌ともいふべきもの」であった。これらは、基本的に詩や文章の投稿誌であって読物が主体ではなく、従って、二十年代から現れた少年雑誌とは性格を異にするものと考えられる⁽³⁾。

一八八七（明治二〇）年施行の「中等学校令」という教育制度の改革により、中学校の生徒数は飛躍的に増加したといわれる。中等学校令がこの新しい読者層への認識を促し、二十年代に相次いだ少年雑誌の誕生を促す重要な要因となったことは確かであろう。また、この頃は近代日本の飛躍的な発展が一定の成果を上げた時期である。それまで欧化政策のもとにひたすら西洋文化の移入に努めていたことに対する見直しが始まり、国体擁護、国粹保存へと方向を転換させつつあった時期でもあった。雑誌の内容も当時の社会情勢を反映させたものとなっていたのは当然であった。少年雑誌は一八八八（明治二一）年創刊の『少年園』に始まり、続いて『日本之少年』（一八八九）、『少国民』（一八八九）、『少年文武』（一八九〇）などがこれに続いた。これらは、説き物としての多様な内容の特徴としており、後に続く雑誌の基本的なスタイルとなった。

一九〇二（明治三五）年に『少年界』を創刊した金港堂は、それに遅れること数か月で『少女界』を創刊している。少女雑誌の始まりとされる『少女界』創刊以降、少年雑誌の主な出版社は続々とその姉妹誌としての少女雑誌を刊行していくことになる。創刊八年目（大正四年）に発行された『少女界』臨時増刊号の「編集しながら」という記事には編集の苦心について、「本誌は単に諸嬢の娯楽のみ目的としてこしらえて居るのではなく、常に社会教育の一端に資する考を以てこしらえている以上、社会一般からも監督を受くべきものである」と社会教育に役立つものという編集の目的が明確に述べられている。金港堂とライバル関係にあった博文館は、一九〇六（明治三九）年に『少年世界』の姉妹版『少女世界』を創刊したが、『少年世界』（一九〇六年八月号 第十二巻十号）の巻頭に掲載された広告文には、「専ら斬新に有益なる材料を網羅し、以て後日の賢母たり良妻たる人の良師たり良友たらしめるのであります」とあり、社会教育の師として後の良妻賢母教育を担おうとする意図が明示されていた。

一九〇八（明治四二）年、紀元節に合わせて創刊された『少女の友』は、数ある少女雑誌を代表する雑誌の一つと云って差し支えないであろう。主筆星野水裏は発刊の辞でその編集に掛ける信念のほどを述べている。少女の時代は如何なる色にでもすぐに染まり易く、また一たび染まった悪習慣は容易に直すことができないとし、「此悪い習慣を防ぐには学校と家庭との外に、少女に取りて面白く有益な読み物が最も必要であります……此「友」こそ実に我が少女を導いて、やさしく、うるわしく、人に敬愛せらるる婦人となるに無二の師友である」⁴。先行の二誌に『少女界』と『少女世界』があり、特に販売部数が五万部を超えていた『少女世界』を大いに意識して実業之日本社は、『少女の友』を同社の婦人雑誌『婦人世界』の妹雑誌と位置付け、「よき妻」「賢い母」の予備軍を育てる編集方針を採った。

一九二三（大正一二）年の講談社『少女倶楽部』の刊行は、これに先立つ大正三年の『少年倶楽部』創刊時にその「半身」としてすでに計画されていた。『少年倶楽部』の創刊に際し、社主野間清治は独自の信念をもって「国民性の啓発と涵養」に力を注ぐことを述べている。その目的とは、第一に学校教育で不足していると思われる精神教育を補うことで、自身の教師としての経験から学校教育が「知育」に偏り過ぎていることに対する批判が根底にあった。強い感銘とか感激を生む教育が不十分であるため、この方面を補いたいと考え、雑誌による教育の目的を「知育」に対する「徳育」に置こうとしたのである。批判の矛先は学校教育の延長という性格が強かった当時の学習雑誌にも向けられており、それらとは一線を画する少年雑誌をめざした。そのためには、少年達が自発的に楽しく読むことができ、知らず知らずのうちに教育効果が上がると読み物が望ましいとして講談によって少年をよくするという考え方を取った⁵。講談の伝える精神、その面白さに雑誌の目指す教育と重なるものを見ていたのである。

明治末期には、講談の内容を記録した「講談本」が流行したが、この出版で成功した講談社はもとも「講談倶楽部」を発行しており、『少年倶楽部』はそのジュニア版ともいえるもので、後に誕生する国民的雑誌『キング』にもその伝統は受け継がれていく。講談本といえば、大正期に大阪の立川文明堂が出版した講談の話芸を引き継ぐ「書き講談」による少年読者を主な対象としたシリーズ『立川文庫』を忘れることはできない。一九一一（明治四四）年から一九二三（大正一二）年に二百数十篇を刊行し、小中学生を中心に人気を博したが、大正末に至ってその人気も衰えていった。一九一〇（明治四三）年に刊行された小川未明の『赤い鳥』とその系列を芸術的な児童文学を代表するものとすれば、一般的な立川文庫のイメージは大衆的・通俗的で、尾崎秀樹によれば、「人物の設定、

状況のつかまえ方、筋書き、そういうものが類型的で、繰り返し語が多くて、表現自体に月並みなものが少なくない」が、それでも立川文庫が当時の小中学生に大いに読まれた理由は、そうしたものを超える重要なポイントとしての『イマジネーション』の問題であり、立川文庫の持つ想像力といったようなものが子どもの世界に持ち込まれたことが、それまでの児童文学と違って大きなインパクトを与えたのであろう⁽⁶⁾。

遅れて一九二三（大正一二）年に刊行された『少女倶楽部』も同様の信念に基づく雑誌教育を目指しており、編集主任には長く教育界に身を置いていた宇田川鈞が就任した。すでにくつもの少女雑誌が存在する中に新たに参入するには独自の新機軸を打ち出す必要があった。そのために三年間の準備期間を置いたというが、少女に対する次のような認識に行きついている。すなわち少年に比べ余程感情的であり、「偉くなれ」「野心」はそれ程必要ではない、教養ある婦人というだけでなく、良妻賢母^レにならねばならない、品位ある言動と伝統的な（武士的な）婦人の勇氣、といった表現が用いられている⁽⁷⁾。『少女倶楽部』が徳育を中心信条として忠君愛国の思想、大和魂を掲げ、「偉大なる人」にならねばならぬということを標榜したのに対し、少女雑誌の教育的機能が目指したものは当時としては当然のことながら「良き妻」であり「賢い母」であった。この言葉のもとに少女読者はあらためて将来立派に大日本帝国を背負う人材を育て補佐すること、つまりそうした人材を再生産するという役割を与えられたのである。それは、この役割を果たすことで大日本帝国の忠君愛国の民として初めて認められる存在になるということであった。佐藤りかによれば、少女に「良妻賢母」という共通の使命が与えられたことで、少年たちが雑誌をめぐる作り上げたような、将来、大日本帝国国民としてこの大帝国を担当するという使命を共有する「想像の共同体」を少女たちも作り出す機会が生まれたということを意味するものだった。本田和子も明治三十年代に登場した少女雑誌群が関与した少女にのみ共有可能な「幻想共同体」の成立について詳しい考察を行っている⁽⁸⁾。

子どもの本や雑誌が誕生する際には教育界からの要請が一つの大きな要因であることはよく指摘されるところである。教育制度を整備していこうという時にはまず教科書の問題が第一であるが、やがてその他の課外読み物への要請も生じてくる。鳥越信は、大正時代に生じた新しい教育運動と『赤い鳥』の出現は完全に密着しているとし、実際に現場の教師や師範学校の学生が非常によく読んで、彼らを通して教育現場に持ち込まれたのであろうと指摘する。『赤い鳥』系列の本は、おそらく学校図書館にも入っていたであろうし、特に都会の中産階級を中心に親に買ってもらえる本として家庭教育にも用いられていた⁽⁹⁾。

一八八七（明治二〇）年前後は、政治・経済・文化といった諸領域において日本社会の近代化がある程度成し遂げられた時期である。一八八六（明治一九）年の小学校令、一八九〇（明治二三）年の改正小学校令と教育勅語によって国民教育の基盤が整備された。この時代の近代児童文化は雑誌・出版物等の所謂「少年書類」の出現に始まった。少年書類という言葉は明治期には少年文学と呼ばれた児童文学のことで、当時の文化的風潮を背景に児童文学の創造や児童雑誌の刊行が盛んになった。図書や雑誌等の形を取った少年書類について「少年園」第一巻第九号掲載の「少年書類に就いて」では、「学校以外の天地に在りて、教課以外の晝夜にありて、彼の學校の嚴肅を感じず彼の受業の辛苦を覚えずして、……繙讀して、以て快樂と利益とを得せしむるの目的」を持つと述べられているように、学校教育以外の場で読まれる課外読み物と性格付けられていた⁽¹⁰⁾。

そうした時代に学校教育が課外読み物を必要としたことを示す具体的な例として教師達の側から新しい児童文学の創造への試みがなされている。一八九九（明治三二）年、大日本教育会は初めての創作児童文学の懸賞募集である「少年書類懸賞法」を発表した。少年書類への当時の教育界の要請が見て取れるが、募集要領によれば、懸賞という方法によって小学尋常科第一年級を卒業した児童のレベルを標準とした「之ニ適スベキ趣味多キ書籍ノ著述ヲ世ノ有志者ニ募集」することが目的であった。求められたのは「書中記載ノ事物ハ修身ニ益シ、又ハ艱難辛苦ヲ冒シ、主トシテ農工商上ニ身ヲ立タル者ノ事績或ハ理科ニ関スル」作品である⁽¹¹⁾。最終的に選ばれた「少年の玉」は日本最初の少年向け創作文学といわれるが、一八九一（明治二四）年に博文館のシリーズ「少年文学」の第一篇巖谷小波作「こがね丸」が世に出て、その大成功の陰に隠れ殆ど注目されないままに終わってしまった。その理由は内容と当時の小学校教科書のものに近い文体にあったといわれる⁽¹²⁾。「少年文学」は正に時宜に適ったものであり、「こがね丸」の成功により作者巖谷小波はお伽作家としての地位を確立し、明治後半にはお伽文学が隆盛を極めることになった。

新しい少年書類の誕生は学校教育と直接結び付いた形で実現したが、その本来の位置付けはあくまで学校教育を補完するものであり、家庭教育や今日の社会教育に相当する通俗教育の必要に應えるものであった。明治三十年代以降、近代国家の成立に伴う国民生活の変化によって児童の生活も影響を受け、教育においても学校と家庭の連携が重視され家庭教育が関心を集めるようになっていた。学校教育に対して学校を終了した後に自らの意志で行う自己教育が社会教育（通俗教育）であるが、家庭教育という領域はそれとは別にあり、学校と家庭が協力して子どもの教育を万全なものとする目的で重視されるようになっていた。実際には、学校教育の優位は明らかであ

り、家庭教育は公教育体制に対し従属的に位置付けられたに過ぎなかった。雑誌による教育の基本的性格は、学校教育に対する社会教育、あるいは知育に対する徳育としてのそれであり、学校教育、校外教育であった。

2. 雑誌と児童のための図書館

一八七二（明治五）年の我が国最初の国立図書館である官立書籍館の設立に始まり、明治十年代に入ると各府県に公立書籍館が設けられるようになった。裏田武夫と小川剛は、これらの図書館を文化施設として孤立的に捉えず、「教育制度全般という文脈のなかで学校教育と相俟って教育を全きものとする社会教育機関」と捉えていることが、その後のわが国の図書館行政の基本路線を決定するに当たって重要な意味を持つことになったと指摘する^{（1）}。社会教育という呼称は通俗教育とほぼ同義の言葉として明治から大正中期まで用いられ、以降は社会教育に統一されていった。気を付けなければならないのは、この時期に図書館が担った社会教育（通俗教育）は現在のそれとは目的・内容が異なり、日清、日露戦争後の社会的混乱とその中で生じてきた社会主義的な動きを封じるために国民の教化を図るという政府の意向が色濃く反映されたものだったことである。明治末に至り、その必要が益々強くなるにつれて社会教育機関としての図書館の在り方を規定することになっていった。

一八八二（明治一五）年、文部省が地方学務局に対し「通俗近易ノ図書ヲ備存シテ庶民ノ展覽ニ供セシメモ以ッテ読書修学ノ気味ヲ下流人民ニ配與セントスル」との通達を行った。欧米列強に伍する国家体制を作るため国民教育の重要性が認識された結果である。以降、通俗近易の図書を置いて閲覧に供する機関として通俗図書館が普及することになる。明治一八、一九年頃、通俗教育が教育行政の管掌事項となった。当時の通俗教育は主に教育関係者による半官半民の団体である教育会が中心的役割を担っており、講話会、幻灯会・映画会、教育品展览会等を開催、教育会図書館の一般公開も行われた。教育会は、明治時代中期以降の教育の進展に大いに貢献したといわれる。当初は就学の奨励が主な目的であったが、教育制度の確立に従って国民の一般的な啓蒙教育を担うようになっていった。そのための手段として一般民衆の教育のための社会装置である通俗図書館と称される小規模図書館の設置が教育会を中心に全国的に展開されていった。「通俗図書館は学校と提携し、若しくは、学校教育の後を受けて之を補足繼續し、学校教育の効果を確実に収めんこと

を目的」としていた⁽²⁾。明治末から大正初期にかけて、民衆教化のための地方改良運動に図書館を活用するという政府の意向を受けて図書館設立の動きは益々盛んになり、明治末の四四五館から大正末には四、三三七館へと大幅に増加していった。社会教育行政の指導の結果であろうが、大半は蔵書規模からみても施設のにも大変貧弱なものに過ぎず、塩見昇によれば、「校長が館長、教師が司書を兼ね、蔵書のきわめて貧弱という体制ではさほどの効果はおぼつかない」⁽³⁾であった⁽⁴⁾。

児童のための図書館としては、一八八七（明治二〇）年には、全国の教育会を代表する大日本教育会が付属図書館を開館、児童室も公開されており、これを児童図書館の初めとする見方もある。学校の正課外の児童の自由な読書は有害であるとする考え方はまだ根強かった。その中で、条件付きではあったが、自由な読書を認めた背景には、当時の図書館行政の第一人者である田中稲城の学校教育に対する批判と「学校教育」の重要性への主張があった。田中は同館新築書庫落成式で「学校教育」として子どもの読書の重要性について説いている⁽⁵⁾。

一八八七（明治二〇）年に博文館を創設した大橋佐平は、欧米の図書館事情を見聞した経験から公共図書館の存在意義を強く認識していた。一九〇二（明治三五）年に大橋図書館を設立、十二歳以上（小学校五年以上）の利用が認められていた。博文館は、児童図書や児童雑誌の出版に実績があり、「少年世界」、「少女世界」、「日本之少年」を刊行していた。その蔵書は博文館の書庫に在った夥しい雑誌と自社発行の図書雑誌類が核になっており、当時としては相当な規模のコレクションであった。「財団法人大橋図書館和漢図書分類目録」（一九〇七）の第一門の六「雑誌、新聞」には、前記の自社刊行の雑誌の他に「太陽」、「中学世界」、「女学世界」、「少女界」、「少年界」などが挙げられている。

最初期の児童のための図書館として注目され、広く影響を与えたという意味でまず挙げなければならないのは、一九〇八（明治四一）年新設の東京市立日比谷図書館に設置された児童室であろう。開設時から児童室を設置し、児童用図書審査委員会により児童向け図書が選定され、専任の係が配置されていた。開室と同時に多くの児童が押し寄せ大変な盛況ぶりであったといわれる。日比谷図書館の活動については賛否両論があったが、広く注目を集め児童図書室の普及につながった。一九二二（大正元）年、文部省が刊行した「図書館管理法 改訂版」では、児童図書室について「児童ノ為ニ特ニ閲覧室ヲ設ケ……随意ニ児童ニ閲覧セシメ」、管理者は「讀書ノ監督誘導」により読書習慣を養い、読書趣味を養成する役割を果たすことを求められていた。「但此閲覧室ノ事ニ付テハ多ク異論モ之ナキ

ニ非ズ猶研究ノ餘地アルベキナリ」としている。児童室を開設し児童を歓迎したことは、図書館側の予想を越えた反響を呼び、「兎も角も開館するや否や収容人員の数十倍といふ児童が押懸けて来て、どれほど断をいっても帰らないといふ勢い」であった⁽⁵⁾。日比谷図書館で受け入れていた児童図書目録「児童読物」(大正一五年版)の雑誌部門の「少年少女の雑誌」では、「子供の科学」、「少女叢報」、「少女倶楽部」、「少女號」、「少女世界」、「少女の友」、「少年グラフ」、「少年倶楽部」、「少年世界」、「スカウトグラフ」、「少年少女譚海」、「日本少年」、「赤い鳥」、「金の星」、「童話」、「虹」といったタイトルが並び、こうした雑誌が提供されていたことがわかる。

これに先立つ一九〇二(明治三七)年、東京市議會議員坪谷善四郎が提出した「通俗図書館設置に関する建議」が市議会で可決されたが、図書館は「尋常高等の各小学校と並び立ち児童をして任意に学ばしむる所」と性格付けられていた。一九一〇(明治四三)年には文部大臣小松原英太郎により地方長官に対し訓令とそれに附随する「図書館成立ニ関スル注意事項」が発せられたが、そこには図書館には児童室を設けるのが望ましいことが述べられている。また通俗図書館にあつては、「健全有益ノ図書ヲ選択スルコト最肝要ナリ」とされていた。明治初頭から三十年代にかけての社会教育施策は、図書館、博物館等の社会教育施設の整備が中心であったが、日露戦争以後は本格的な整備の時代を迎えることになった。通俗教育については、一九一(明治四四)年に政府は勅令第一六五号をもって通俗教育委員会を設置、本格的な取り組みを始めている。委員会は通俗教育に関する行政を行ったが、その目的は健全な国民思想の涵養にあった。

少年少女に関わりのある図書館としてもう一つ挙げられるべきは学校の図書館であろう。学校図書館が法的根拠を与えられたのは戦後の一九五八(昭和二八)年の学校図書館法によつてであり、戦前のそれは大学や専門学校など高等教育機関の図書館も含めて文字通り学校内に設置された公立・私立の図書館の総称であった。塩見昇は、それらは真の学校図書館としての機能を果たしていたわけではなく、従つて直ちに学校図書館の祖とすることはできないとしたうえで、「なかには学校教育の中での活用や利用の指導を行うなど、学校図書館としての働きを併せもつものもみられた」と指摘している⁽⁶⁾。また実際に全国に普及した通俗図書館の多くは小学校に附設されていたこともあつて両者の区分を曖昧なものになった。

一九一四(大正三)年に日比谷図書館館長となつた今沢慈海は、明治期に私立の少年図書館を運営していた竹貫直人(佳水)とともに「児童図書館の研究」(一九一八 博文館)を著し、学校の多くは教科書一点張りで読書力は養っているが読書趣味は養っていない

ため、読書習慣と同時にそれを養わなければならない、と述べた⁽⁷⁾。ここで述べられていることは読書指導の重要性への認識であり、独立した児童室を設ける第一の理由もそこにあった。この頃から図書館関係文献にも読書指導に関する記事が散見されるようになる。「児童図書館の研究」はこの分野に関する最初の文献として欧米の先進的な事例を多く紹介し、児童図書館の普及を助けることになった。

おわりに

この時代の少女たちの読書生活を変化させ近代化へと導いたのは少女雑誌であると言われるが、実際にその読書生活にどのような影響を与えたのかを明らかにするための一つの試みとしてこのテーマを取り上げた。明治・大正期に多数刊行された少女少女向け雑誌が教育目標を掲げていることと、ほぼ同時期に国家政策として通俗図書館が急速に普及したことの間には何らかの関連があるはずであり、その点を明らかにしたいと考えた。両者に直接のつながりがある訳ではないが、いずれも「学校外教育」に重要な役割を見出そうとしていたのがわかる。

当時の政府の図書館政策について印象が強かったのは、過大評価といえるほどに図書や雑誌のいわゆる「良書」による教育効果を期待していたように思えることである。通俗図書館の実態を知るほどにその教育効果には疑問を抱かざるを得ない。図書館利用者にしても、雑誌の読者にしてもそうした意図からは全く自由なところで雑誌や図書を読書生活に取り入れていったとは思えないのである。

〈注〉

1.

- (1) 尾崎るみ『少年圖』の創刊と少女読者―明治の少女向け読み物の軌跡(一)―『論叢児童文化』四一号 二〇一〇年 三四頁
- (2) 佐藤りか『「少女」読者の誕生―性・年齢カテゴリーの近代―』『メディア史研究』一九卷 二〇〇五年
- (3) 飯干陽『日本の子どもの読書文化史』あずさ書房 一九九六年 八五頁

- (4) 実業之日本社社史編纂委員会『実業之日本社百年史』 実業之日本社 一九九七年 四九―五三頁
- (5) 講談社社史編纂委員会『講談社の九十年』 講談社 二〇〇一年 二七七―二八〇頁
- (6) 尾崎秀樹、西郷竹彦、鳥越信、宗武朝子『子どもの本の百年史』 明治図書出版 一九七三年 七八頁
- (7) 講談社社史編纂委員会 前掲書 五二四―五二五頁
- (8) 佐藤りか 前掲書 三三頁、本田和子『女学生の系譜 彩色される明治』 青土社 一九九〇年
- (9) 尾崎秀樹、西郷竹彦、鳥越信、宗武朝子 前掲書 四一頁
- (10) 城戸幡太郎、波多野完治、百田宗治監修『児童文化 上』 西村書店 一九四一年 三〇頁
- (11) 犬飼和雄『文体から見た日本児童文学の誕生』『社会労働研究』 三五卷三・四号 一九八九年 一一頁
- (12) 同書 一三頁

2.

- (1) 裏田武夫、小川剛『明治・大正期公共図書館研究序説』『東京大学教育学部紀要8』 一九六五年 一五八頁
- (2) 同書 一六四―一六五頁
- (3) 石井敦『日本近代公共図書館史の研究』 日本図書館協会 一九七二年 二五二頁
- (4) 坂内夏子『戦後児童サービスの必要性の認識』『学術研究…人文科学・社会科学編』 六一号 二〇一三年 五四頁
- (5) 渡邊又二郎『児童図書館に就いての偶感』『図書館雑誌』 第六号 一九〇七年 四四四頁
- (6) 塩見昇『日本学校図書館史』(図書館学大系 第五卷) 全国学校図書館協議会 一九八六年 一四―一五頁
- (7) 今沢慈海、竹貫直人『児童図書館の研究』 博文館 一九一八年